

## テスト氏とレオナルドの頃のヴァレリー

ミシェル・ジャルティ

今井勉 訳

1) ヴァレリーの生涯において、1895-1896年という時期は、かなり独特な位置を占めています。というのも、ヴァレリーはそれに先立つ1892年、いわゆる「ジェノヴァの夜」において、決定的な大変動を経験し、作家という職業に進むことを放棄したはずだったにもかかわらず、この95-96年という時期に、二つの傑作散文、すなわち、『レオナルド・ダ・ヴィンチ方法序説』と『テスト氏との一夜』を書いているからです。この二つの作品については、実に多くの研究がこれまでになされてきましたが、本日の私のお話は、これまでの様々な解釈に加えて私の解釈を示すのではなく、実は、ちょうど今、私はヴァレリーの伝記を書き進めているのですが、それを活用しまして、この二つの作品の執筆の経緯、状況について、いくらか詳しく明らかにしようとするものです。こうした執筆状況をめぐる考察が、二つの作品の射程を照らし出すことにもなるのではないかと考えています。『レオナルド・ダ・ヴィンチ方法序説』（以下、『序説』と省略します）は、ご存知の通り、注文から生まれた作品です。注文に至った経緯はよく知られているところです。（1894年の）ある日、マルセル・シュウォップの小さなアパートマンで、ヴァレリーは、レオナルド・ダ・ヴィンチについて、実に見事な話しぶりを示しました。それは、ずっと以前から、ヴァレリーが夢中になっていたテーマでしたが、特に、数ヶ月来というもの、ヴァレリーは、いっそう具体的に、レオナルドについて思考し、友人たちにも特に好んで話をしておりました。ところで、その日、レオン・ドーデ——小説家のアルフォンス・ドーデの息子です——が居合わせていて、ヴァレリーの話にとっても感銘を受け、ジュリエット・アダン夫人にヴァレリーを紹介することになりました。レオン・ドーデはアダン夫人をよく知っておりました。夫人が1879年に創刊した総合雑誌「ラ・ヌーヴェル・ルヴュ」で、レオン・ドーデのデビュー当時の作品がいくつか掲載されたという関係もあって、彼は夫人が主宰するこの雑誌の手伝いをしていたのです。このジュリエット・アダンという女性は、レオン・ドーデの父親であるアルフォンス・ドーデの友達であったほか、モーパッサンやツルゲーネフ、ピエール・ロチやポール・ブルジュの、さらには、フローベールの友達でもあったという人物です。フローベールはジュリエット・アダン夫人の雑誌に『ブヴァールとペキュシェ』を発表することを約束しており、フローベールの死後すぐに、「ラ・ヌーヴェル・ルヴュ」はこの小説を掲載しました。（1894年当時で）58歳のアダン夫人は、著名人でした。彼女自身、作家であり、ジョルジュ・サンドやデュマ・フィス、メリメと交友がありました。パリの警視総監で、後に上院議員となるエドモン・アダンと結婚した後は、第二帝政の時代からサロンを主宰し、そこには、まず、政治家たちが集いました。その中には、

特に、ガンベッタ（1838-82 第三共和制期の指導者・首相）が居て、彼女はガンベッタの女性助言者（影の女）でした。その後、作家たちが集まるようになって、政治的サロンだったのが、（1894年当時には）特に、文学的なサロンになっていました。ジュリエット・アダンとは、新しい才能をひっぱりだすことに熱心な女性で、若いヴァレリーも、アダン夫人の興味を引きました。それで、1894年12月12日、アダン夫人は、ヴァレリー宛に手紙を送り、論文をひとつ、いや、ひとつに限らず、いくつか、書いてくれないかと依頼しました。アダン夫人は、最初の一本はダ・ヴィンチ論に当ててもらおうが、「以下、続く」という記載の入る連続モノではなく単発論文にしてほしいこと、他の論文は様々なテーマに触れてもらいたいこと、そんなふうに望んでいたようです。

2) すでに以前から自作を発表する意志のなかったヴァレリーがこの注文を引き受けたのは、もちろん、このテーマがヴァレリーの興味を刺激したからです。とりわけ、「カイエ」を書き始めていたことが示すように、「ジェノヴァの危機」は収束していたことが考えられるでしょう。ヴァレリーの業績の中で、「ラ・ヌーヴェル・ルヴュ」向けのこのエチュードは、その後彼の生涯で長く続くことになる一連の注文原稿の最初のものとなっただけでなく、ヴァレリー自身の新たな出発を促した推進力ともなった作品であります。こうして、レオナルドは数ヶ月に渡ってヴァレリーの中心的な仕事の対象となり、この作品は1895年の大きな出来事となるのです。ヴァレリーにとっての問題は、もちろん、どのような論文を書くのか、ということでした。最初のうち、ヴァレリーはいろいろと迷っていたらしいことが、母親や兄のジュール・ヴァレリー宛の手紙——定期的に書かれていたこれらの手紙は愛情を込めて「私の親愛なる家」という文言から始まっておりますが、——こうした家族宛の手紙から窺えます。たとえば、「私は、闇取引をして安っぽい代物を作るのか、それとも、豪華な論文を作るのか、豊かで、高度に斬新なオブジェを創るのか、塩茹でしたろくでもない付け合わせを作るのか、まだわかりません」といった文言が見えます。こうした迷いは気取りなどではなく、本当のためらいだったと思います。というのも、一方で、アダン夫人がヴァレリーに期待していたのは、専門的に過ぎるような評論ではなく、むしろ、レオナルドに関するヴァレリーの考えの紹介、誰にとっても近づきやすいような紹介的文章だったことは容易に想像できることであり、他方で、ヴァレリーが斬新さを求めているのは、まさに、ヴァレリーのレオナルドをめぐる考えが彼自身にとって新しいものと思われたからです。しばらく前から、ヴァレリーは、天才という概念について考えをめぐらせていました——たとえば、ナポレオンは、ダ・ヴィンチと同じく、ヴァレリーにとって偉大な人物と映っていました。天才と並んで、ヴァレリーの思考の対象となっていたのが、普遍的人間（万能の人）という観念です。二年来、彼のノートの中では、レオナルドは主要な参照となっていました。ヴァレリーがレオナルドのうちに強い興味を抱いていたのは、レオナルドの絵画ではなく、発明家および理論家としての、その知のあり方、そして、その知を、実際の様々なものに適用するその実現の様相——この制作の幅は実に変化と多様性に富んでいるために、その広がりには普遍性（万能性）の域に達しているような、

そういう普遍性（万能性）そのものでした。こうして、方針は決定しました。つまり、彼のエチュード（ヴァレリーのレオナルド論）は、実際に存在した人間や作品に関わるものではなく、ある精神が、その生み出すものと結ぶ関係に、その創造物が置かれる世界と結ぶ関係に関わるものとなるのです。ヴァレリーは、家族宛の手紙で、自らの計画を、次のように要約しております。

3)「僕は芸術批評や博識のことは無視します。よく知られたダ・ヴィンチを僕は遠ざけ、ダ・ヴィンチ的な精神のひとつの（力学的モデルという意味での）モデル、僕にとってはすべて、次のような点に還元される問題の諸条件を確立したいと思っているのです。すなわち、「ダ・ヴィンチは普遍的な（万能の）精神であったと言われるが、これはどういう意味なのか？この命題の実際はいかなるものなのか？人は普遍的（万能）になりうるのか？普遍的（万能）になる方法は存在するのか？そのような精神を構成する必要条件、論理的かつ類推的な条件とはいかなるものなのか？」ファラデーやケルヴィン卿といった人達の極めて見事な科学的方法を採用すること。すなわち、（これらの科学者たちもはっきりとは引き出さなかったことですが）想像力というものを、共通の尺度を持った装置として研究すること、そして、想像力に関わる現象そのものを、それが非常に数多くの様々な事物の間に自動的に創り出す関係の尺度として研究すること、それが僕の目指すところなのです」。そして、ヴァレリーは「この仕事はきわめて困難です」と付け加えています。実際、（モンペリエの兄ジュール宛に送られた）このヴァレリーの手紙は、かなり難解なものに映ったに違いありません。特に、ここで用いられている専門的な言い回しは読む側を少々びっくりさせるようなものだったはずですが、パリで、言わば遅れてきた学生のディレクタント的生活を送っていたヴァレリーは、時折、自分が今関心を注いでいる真面目なことがらについて兄ジュールに示そうとすると、**cuistrer**（生半可な知識をひけらかす）、つまり、得意げにちょっと利口ぶってみせるところがありました。このようなヴァレリーのレオナルドは、したがって、ひとつのポルトレ（肖像・ポートレイト）であります。しかし、それは、或る構築された存在のポルトレなのです。そのことは、『序説』の第二段落（これは執筆過程の一時期において第一段落だったものですが）が早々と明確にしている通りです。「あるひとり人間——彼の様々な行動が、それぞれまったく異なったものと見えるので、仮にそれらの行動の基底にひとつの思考を想定しようとする、これ以上広い思考はないだろうということになるような人間——私はそんな人間を想像しようと思論んでいるのだ」。

4) 執筆開始当初しばらくの間、ヴァレリーは、自分のテキストの標題として、**Figura di Leonardo da Vinci**（レオナルド・ダ・ヴィンチの形象）というイタリア語のタイトルを考えていました。問題は、したがって、レオナルドのような、知と力と統御がひとつながら集合した精神の形象（形・フィギュール）を提示することができるかどうか、ということでした。しかし、それはまた、同時に、その多様な作品が同じひとつの機能に関連しているようなひとつの形象、こうした多方面に分岐した創造（クリエイション）の中心に存在

する天才の形象でもあります。ヴァレリーにとって天才という例外的存在を構成しているのは、天才は、他の者たちには見えない諸関係を、世界の中に発見するということであり、そして、ちょうどその発見とシンメトリーをなす形で、天才は、今度は、世界に対して、彼の想像力が産みだした構築物を投影するということなのです。『ユリイカ』におけるエドガー・ポーと同様、ヴァレリーは、精神の構造と世界の構造の間にはなんらかの関係があることを確信していました。それはつまり、見出すべきは、この総体の連続性だということです。そして、ようやく、この総体の統御を実現している人間を名づけることが可能となります。すなわち、「思考によって成り立つこの人物には名前が欠けており、そのために平常はあまりに遠く懸け離れ、ともすれば見失われがちなその両端の膨張を制御することができないのだ。レオナルド・ダ・ヴィンチという名前以上にふさわしい名前はまったくないと、私には思える」。

5) この評論が提起している問題は、或る意味では、やがてテスト氏が提起することになる問題、すなわち「ひとりの人間に何ができるか」という問いと同じように思われます。しかし、『序説』においては、創造（クリエイション）は破壊と緊張関係にあります。すなわち「ひとりの人間から何が残るのか？」という問いです。この問いをヴァレリーは、1892年の未完のテキスト「死すべきものについて（人間論）」の中で提起していました。このテキストでヴァレリーは、天才的な人間において、その自然の死に至るまで、その精神のすべての組み合わせを汲みつくすという可能性を検討していました。ところで、この問いを、『序説』の冒頭句は、次のようにひっくり返すのです。「ひとりの人間のあとに残るものは、彼の名前と、そして、その名前を感嘆や、憎悪や、あるいは無関心の徴たらしめる彼の業績とを手がかりに、ひとびとが心に思い浮かべるあれこれのものである。われわれは、彼もまた思考したのだと考え、そして、じつはわれわれが彼に帰したものである思考を、彼の業績のなかにふたたび見出すことができるのだ。われわれ自身の思考にかたどって、その思考をふたたび作り上げることができるというわけだ」。この「われわれ」という一人称複数形の人称代名詞の背後にあるのは、もちろん、レオナルドと、そこに位置するヴァレリー自身の、独特の対面であります。すなわち、ヴァレリーは、テキストの開始早々から、自らのモデルに自己同一化し、相手に自己を投影しているのです。このエチュードのタイトルとなっている「レオナルドの方法」とは、まさしく、ヴァレリー自身が自らのために作り出している方法の謂いに他なりません。

6) しかし、私たちにとって、この評論が、その開始早々から孕んでいる価値というのは、さしあたって、あらゆる文学から離れて、最初のヴァレリー的な「詩学」をこの『序説』が構成しているという事実であります。作家ヴァレリーは、後に、作品の制作と生成を支配する様々な規則について特に強い関心を示すようになりますが、既に、『序説』の段階から、そうした作品生成への強い関心を明らかに見て取ることができます。テキストの第四段落は、創造（クリエイション）の一般法則の可能性を予告している点で、そのことをよく示しております。「人間の業績に下される判断をゆがめている多くの錯誤は、その業

續の生成過程を奇怪にも忘却していることに基づく」。ヴァレリーはさらにこう付け加えています。「作品をいかにしてかたちづくったかを語る勇気をもつ作者はきわめて少ないが、私の考えるところでは、それを知る危険をあえて冒した作者の数も、同様にあまり多くはない。こうした探究は、苦しみを堪えて光栄に関する諸概念と称賛の形容詞とを放棄することからはじまる。それは、優越性という考え方も偉大さへの偏執ともまったく相容れない。それは見かけの完璧の下に相対性を発見させる。もろもろの精神は、それぞれの所産がそう見せるほど深く相異なるものではないと思わせるために、この探究が必要なのだ」。

『序説』は創造（アンヴァンション）に関するひとつの理論であり、作るということのまったき普遍的なものが素描されるひとつの一般的な詩学なのです。

7) このテキストの逆説、それは、実にきっぱりとしたひとつの理論を規定しようとしている一方で、それが「序説」と表示されている点です。この時期のヴァレリーは、いろいろな計画を持っておりましたが、それらは互いによく似たタイトルを持っていました。たとえば、「未来の書物のための序文」とか「新たな分析のためのプロレゴメナ（序論）」といったタイトルがあります。それは、自分自身の仕事に対する後退の身振り、仕事に着手しつつも、それが本当に始まることを認めたくないというような身振りを表すものです。こうしたタイトルには、自分自身の未知の領域に進みいろうとしつつ、そこには、かなり大胆な勇気を持って、自らを危険にさらすというような含みがあるでしょう。『序説』というテキストの逆説はそれだけではありません。当時、文学から遠ざかっていたヴァレリーがレオナルドにひきつけられたのは、レオナルドもまた作家ではなかったから、ということがありますが、そんな、文学から離れたはずのヴァレリーが書いたこの『序説』には、彼の全作品の中でも、最も美しい散文が、そこに既に見出されるという事実もまた、大きな逆説です。世界の官能性へと見事に開かれた散文、たとえば、こんな文章が見られるのです。「地面や石塊の墜落に見られる迅速さあるいは緩慢さから、またどっしりと重厚な彎曲から、幾重にも重なる衣服の波形の襲へと彼は進んでゆく。家々の屋根にたちのぼる煙から、遠方の喬木の繁みや地平線に茫漠と霞むぶなの群れへと、魚から鳥へと、海上の太陽の閃めきから無数の華奢な鏡のような樺の葉へと、魚の鱗から入江の上を移動する輝きへと、耳や巻毛の髪から貝殻の凝結した渦巻へと、彼は進んでゆく」。愛撫されるひとつの世界の全体が展開されております。そして、疑いないことに思えるのは、ここで、ランボアの『イリュミナシオン』の教訓がおそらくは生かされているということです。『序説』は理論的なディスクールとして素描されていると同時に、芸術作品となっております。散文とそれが「結果として」もたらす安易さに常に警戒していたヴァレリーは、ひとつの音楽的な精巧な楽曲を編成したのです。『序説』は、プレリュードで幕を開け、フィナーレで幕を閉じます。そして、その間で展開されているのが、鏡像的なシンメトリーの戯れです。このように見事に統御されたこのエクリチュールは、しかし、新しいエネルギー、1892年の危機の後のヴァレリーにおける一種の再生をしるしづけるような躍動感と熱気を示しております。その点、モーリス・ブランショは間違っていないでせう。彼はこう言うてお

ります。「ヴァレリーをして『方法序説』を書かしたあの熱狂と一種の傲慢は、彼のその後の作品に再び見出されることはなかった。[...] 或る個人、その卓越性は熱狂というものにどんな価値も認めないという点にあるような個人に対するあの熱狂、ナイーヴさなどというものはその人にとって無縁であるが故に他のいかなる芸術家よりもヴァレリーが上に置いた一人の芸術家に対するあのナイーヴな思い上がりは、過剰と眩暈の時、弱いが大胆な時を示している。そして、そのような時は、もはや二度と繰り返されることはなかった」。

8) とはいえ、ヴァレリーはかなり速いスピードで仕事を片付けていくことになります。(先ほど引用した) 12月の兄宛の手紙で、ヴァレリーは、あらゆる博識を頑として拒絶するなどと言っていましたが、この『序説』というテキストは、その着想とエクリチュールにおいて、伝統的なテキストからは離れた斬新なものであったとはいえ、ヴァレリーのあらゆる評論の中でも、実は、最も博識に満ちたテキストです。この点においては、ヴァレリーは、当時の恵まれた状況の恩恵に浴していたと言えます。すなわち、美術史家ガブリエル・セアイユがレオナルドに関する書物を出版したばかりでしたし(このセアイユの本に対して、ヴァレリーは一線を画していましたが、刺激を受けたことは確かです)、とりわけ、ダ・ヴィンチ自身の書いたものに容易にアクセスすることができたのです。1881年から1891年にかけて、レオナルド・ダ・ヴィンチの研究者であるシャルル・ラヴェッソン＝モリアンは、全部で六巻から成る(フランス学士院版)『レオナルド・ダ・ヴィンチの手稿』を刊行しました。レオナルドの手稿の写真版と、そのイタリア語トランスクリプション、そして、そのフランス語訳を添えた立派な書物です。1892年末にパリに落ち着いた当初から自由にできた暇な時間の折々に、ヴァレリーは、しばしば、国立図書館に出かけ、これらの書物をゆっくりと眺め、親しんでいました。その後も、レオナルドの手稿に関する出版は続きます。1893年には、同じく、ラヴェッソン＝モリアンが、全六巻の『手稿』と同じ手続きで、『鳥の飛翔に関する手稿』を編纂しますし、翌年には、『アトランティコ手稿』(これは「アトランテ」と呼ばれるフォーマットからその名がつけられているものです)の第一巻がミラノで出版されます。残りの巻は1904年に完結するまで刊行が続くことになります。ヴァレリーは、こうした様々なテキストで知識を吸収しました。そのテキストの中にはもちろん、1651年のイタリア語版による『絵画論』も含まれ、ヴァレリーは、それを、国立図書館で読んでいます。

9) ヴアレリーは、レオナルドに関するこれらの知識に加えて、様々な領域に関連する、かつての読書の経験をも、大いに活用します。すなわち、建築、装飾、絵画、美学、科学などの読書で得た知識です。科学論文の中では特に、ヴァレリーが尊敬し、リュクサンブール界隈で時折すれ違うこともあった数学者のアンリ・ポワンカレが重要です。また、ヴァレリーは、エチエンヌ・ジュール・マレイという医師が、きわめて新しい方法で研究した運動の分析にも興味を持っていました。マレイは、瞬間ごとに近接した写真映像を分解することによって運動を分析した人で、その発見によってマレイは、連続写真術の発明者とされており、『序説』というテキストの博識ぶりは、このように、相当なものなので

すが、たいていは、その博識ぶりが隠蔽されております。たしかに、こうした博識は、この散文テキストの輝きを害することはないまでも、一方で、ある部分、この評論を難解なものにしていることも事実です。この評論は、その土台から、目には見えない（うまく隠された）様々なレフェランスによって構築されているところがあり、その多様な参照物は、しばしば、レオナルド自身の言葉やデッサンを示している場合もあります。ところで、こうした博識の領域において、マルセル・シュウオップの助力が非常に貴重なものだったことは知っておく必要があるでしょう。早い時期から、ヴァレリーは、シュウオップに、自分の仕事について状況を知らせていました。そもそもの事の始まりはシュウオップ宅であったということもあり、『モネラの書』の著者は、喜んでヴァレリーを助けることを買って出ました。二人は頻繁に顔を合わせ、二人の関係は、いつかしたら、本当に友情に満ちたものとなりました。シュウオップは、ヴァレリーを、自分のところへ話をしに寄るように誘って、もし自分がまだ出先から戻っていなかったら、管理人のところで鍵をもらって、先に居間で待っててくれるようにと言ったりしておりました。ヴァレリーがレオナルド論に向かって熟考している間、マルセル・シュウオップはヴァレリーを励まし、行き届いた助言を与えました。ヴァレリーはモンペリエ大学法学部で、かなりディレタント的な仕方で、法律の勉強をただけでしたが、シュウオップのほうは、エコール・ノルマル・シュペリユール（パリ高等師範学校）の入学試験を準備した経験があります。シュウオップは、若いときに、叔父で、マザリヌ図書館司書で有名なオリエント学者だったレオン・カアンカアンの薫陶を受けていますし、フェルディナン・ド・ソシュールやミシェル・ブレアルのもとで、言語学を学んだこともありました。要するに、シュウオップは仕事の仕方というものをよく知っており、したがって、ヴァレリーに「あるひとつの」方法を完全に教えるとはまではないかなくとも、とにかく、ヴァレリーを、より様々な方法へと導くことが出来たのです。ヴァレリーはこうしたシュウオップの熱心な助言にとっても感謝して、未来の論文を彼に献呈するというのを、かなり早くから決めていたようです。

10) これはヴァレリーの習慣なのですが、彼は、既に多くのノートをとっていました。しかし、1895年の初頭、執筆は捗らず、停滞します。1月3日付けのジッド宛手紙でヴァレリーはこんなふうに書いています。「僕は、熱意もないまま、論文に向かっている。外は雪が降っている。すべてがのっぺりとしてぐうの音も出ない。この哀れなダ・ヴィンチはつらい試練の時を過ごしそうだ。太陽もなく、希望もないままに書かれるだろう。テーブルの上に、古いノート、アルバム、手帖、そして封筒の裏なんかを全部出してみた。これらは、さっと捉えられた重要な言葉しか受け付けられないんだ」。ヴァレリーは、さらに、謙遜しつつ、メランコリックにこう付け加えます。「あとは、包装、凝った言い回し（これを僕は、付け合わせのじゃがいもがたっぷりのシャトーブリアンステーキと呼んでいるんだ）、行数稼ぎのための引用を少々、それで終わりさ」。ここで、興味深いのは、こうしたその場その場の証言を超えて読み取れる、ヴァレリーが連続的なエクリチュールに取り組む際に強く感じる困難さです。つまり、ヴァレリーは、着手の人、開始の人、ノートと断章（フ

ラグメント)の人であって、執筆をしなければならないという見通しは、彼が最も激しく書きたいと望んだはずのテキストを、しばしば、嫌な筆記仕事 (pensum には「学校で罰として課した書き取り」の意味がある) に、変えてしまうということです。しかし、同時に、ヴァレリーのエクリチュール (書くこと) においては常に、高揚の (躁状態の) 時期と、意気消沈の (鬱状態の) 時期が交互に繰り返され、自分の書いているものの価値が本当に確信できることは決してないということがあります。『序説』執筆の場合においては、ヴァレリーは、また、この評論に対してなされるだろう周囲の評価・受け取りについて、気をもんでいます。果たして、自分の書くテキストは、「ラ・ヌーヴェル・ルヴュ」誌にふさわしいものなのだろうか?と心配するわけです。ヴァレリーは、二つの選択肢の間でジレンマに立たされます。自分の欲望のままに書いて論文が拒絶されるか?、それとも、自分の欲望に反することを書いて発表にこぎつけるか?この頃、兄ジュール宛に書かれた手紙は、こうした、ヴァレリーの不安をよく示しております。「散歩から戻って、アダン夫人に頼まれた仕事に取り組んでいます。この仕事は僕に、棒でたたくような苦痛を与え始めています。大切な論文の中で、贅沢な対象だけを扱ったはずなのに、実は、つまらないこと、そして、ごくありふれたことをしているというのにはうんざりします」。ヴァレリーは、何を言おうとしているのでしょうか。このまま迷い続けるということなのか、それとも、最終的には、ある程度の安易さを仕方ないこととして認めたということなのか。仮に、後者だとすると、現在、私たちが読んでいるテキストは、それがどれほど難解であるとしても、ヴァレリーが書きたいと望んでいたエクリチュールに比べれば、一層ありふれたエクリチュールであるということになるのでしょうか。はっきりと答えることは困難な問題です。いずれにせよ、ヴァレリーは満足はしていないということがわかります。2月4日、再び、ジッド宛に、ヴァレリーは嘆いております。今度は、一層、緊張の緩んだ調子で「ダ・ヴィンチは最悪の状態だよ」と言っています。ヴァレリーは、マルセル・ドルーアン (この人は、後にジッドの妻マドレーヌの妹と結婚するので、ジッドとは義兄弟の関係に当たります。1895年当時、哲学のアグレガシオン [大学教授資格] の準備をしており、トップの成績で合格し、優秀な大学教授となる人です) に、自分の書いた原稿を見せるのですが、ドルーアンは、数ページほど読んだあとで、ヴァレリーに、君はダ・ヴィンチについて語っていないではないかと指摘しました。ヴァレリーはこの話をジッドに紹介しつつ「僕はそんなことは判りすぎるほど判っていた。でも、この存在についていったいどう言えбайいというのだろう。文体については形容のしようがないけれど、見事なものだ。「注意に値する指摘にわれわれは至った」という類だね」。

11) このように難航しつつも、論文は——結局のところかなり早く書かれたと言えるでしょう——3月の初め頃には脱稿ないしはそれに近い状態でした。ヴァレリーはしかし、自分の書きあげたものが、「ラ・ヌーヴェル・ルヴュ」誌の購読者にとって相当難解なものを受け取られるのではないかと、不安なままでした。3月10日、第一番目の読者、それはもちろんマルセル・シュウオップですが、その意見は、ヴァレリーを喜ばせ、安心させまし



た。シュウォップはヴァレリー宛にこう書いています。「我が親愛なる友よ。それはごく単純に言って「素晴らしい」の一言だ。このような文章は未だかつて読んだことがない。すっかり感動したよ」。しかし、アダン夫人の反応は、シュウォップのそれとはまったく違う危険性が大きいにありました。3月12日、葉書で、アダン夫人は、ヴァレリーに会いに来るように述べ、ヴァレリーは、「ラ・ヌーヴェル・ルヴュ」誌主宰のこの著名な女性と面会します。アダン夫人はこれから十日間ほどポルトガルへ旅行する直前で、旅行の準備に忙しくしており、ほんのしばらくの間、ヴァレリーを迎えただけで、ヴァレリーから受け取った論文を赤い革の書類カバンにしまいこんで、面会終わりとなりました。夫人は実に親切な物腰でしたが、ヴァレリーは、自分のテキストがたどる運命について、まったく安心というわけにはいきませんでした。兄ジュール宛にこう書いております。「アダン夫人は、僕の論文をちょっと長ったらしいと思うのではないかと心配です。その場合、僕は、論文を短くすることはできないので、辞退することになるでしょう」。アダン夫人がヴァレリーの論文を長すぎると思ったかどうかはわかりませんが、いずれにせよ、彼女は、ポルトガル旅行に出る前に、すぐにヴァレリーの論文を読みました。ヴァレリーはといえば、それから二週間の間、何の連絡も受けないままでした。すると、ある晩、マラルメの家で、小説家のロベール・シェフェール（この人も「ラ・ヌーヴェル・ルヴュ」に小説を発表していた人です）が、ヴァレリーに、あなたのレオナルド論は拒絶されたと伝えたのです。なぜ、アダン夫人はヴァレリーに何も言わなかったのか？シェフェールは情報を仕入れて、ヴァレリーに手紙を書き、ヴァレリーがアダン夫人に渡した原稿と夫人がヴァレリー宛に書いた手紙は二週間の間、引き出しの中に眠っていた、というのも、ヴァレリーの住所がわからなかったから、というようなことを知らせました。こうしたことはすべて誠意に欠けるところがあるが、と言って、シェフェールはこう付け加えております。「アダン夫人はあなたのダ・ヴィンチ論をたいへん称賛していたということを是非申し上げねばなりません。ただ、あまり味のきつい食べ物は予約購読者の消化に及ぼす影響が大きすぎるらしく、読者は怒って講読をやめてしまいます」。これは、つまり、古典的な拒絶です。称賛の言葉は、否定の返事を和らげる機能を果たしております。そして、しばらく後、ヴァレリーの原稿は、まるめられて、ゲイ＝リュサック通りの彼の家に送り返されます。そこには、なんらのコメントの紙も付されてはおりませんでした。こうしたぞんざいさ（軽いあしらい）は もちろん、何も解決せず、この事件に、手ひどい扱いという感じを与えるだけでした。しかし、この不本意な結果は、とりわけ、理性を失わせるほどに、ヴァレリーを揺さぶりました。彼は、アンリ・ド・レニエ宛にこう書いております。「告白しますが、私が傷ついたのは、私が母に対して感じている愛情と熱狂との関連においてであり、あなたにお話しすることを許し願いたいのですが、こうした感情との関係においてなのです」。

12) 一言のコメントもないまま原稿が戻ってきたことにおそらくは相当の苛立ちを感じたヴァレリーは、それでも、ジュリエット・アダン夫人宛に、短いけれどもきわめて懇篤な手紙を送っております。そこに、ちょっとした嫌味の言葉を含めることをヴァレリーは

禁じ得ませんでした。自分の論文に関して、ヴァレリーは、こう書いているのです。「論文をお返しいただきましてありがとうございます。私は、返された論文を、興味深く眺めております。といいますのも、この論文は、「注文を受けて」作られた (*être fait sur commande*) という栄誉 (注文で出来た原稿という栄誉) と同時に、「お好みに合わずに」作られた (*n'être pas fait sur mesure*) という不幸 (注文に添わなかった原稿という不幸) を持ったからです」。ヴァレリーのこのメッセージが投函されてすぐ、3月28日、彼は、レオン・ドーデから連絡を受けます。どうやらうっかりミスがあったらしい、と、レオン・ドーデはヴァレリーに書いています。アダン夫人がヴァレリー宛に記した手紙を、返却原稿に同封するのを忘れてしまった、アダン夫人はできるだけ早くヴァレリーに会うことを望んでおり、「全体としてはとても素晴らしいと彼女も思っている」あのレオナルド論について話をしたい、という内容でした。マルゼルブ大通りにあった「ラ・ヌーヴェル・ルヴェ」の事務所に、果たして、ヴァレリーは、出かけていったのでしょうか。人を馬鹿にしたあしらの数々に苛立ったヴァレリーは、出かけることなく、家にとどまっていたらと推測できます。というのも、翌日(3月29日)、アダン夫人自ら、ヴァレリーに手紙を書いているからです。夫人は、ヴァレリーに、「ラ・ヌーヴェル・ルヴェ」側の不手際に関する遺憾の念を示しますが、ヴァレリー宛に書いたはずの通信文はどこかに紛失してしまって、何を書いたか、もはや思い出せないと述べたうえで、雑誌の予約購読者たちは、あるテキストが「ふつうの明快な言語」で書かれていないと、すぐに怒り出して、予約を止めてしまうのだと、ヴァレリーに説明します。これはつまり、ヴァレリーのテキストは難解だということを言っているに他なりません。シェフェールはヴァレリーに、ヴァレリーの原稿は拒否されたのだと話していましたが、アダン夫人は、「作品の偉大な価値の名において」ヴァレリーのテキストの出版を検討します。ただし、夫人は、ヴァレリーに対して、読者をよりよく「おびき寄せる」ために、最初の三ページ分を書き直してくれないかと依頼します。しかし、アダン夫人の要請は失敗に終わります。というのも、自分の原稿がコメントなしに突っ返されて以来、ヴァレリーは、それを、別の雑誌、たとえば、「ルヴェ・ド・パリ」や「ルヴェ・ブランシュ」に載せる道を探っていたからです。「ルヴェ・ド・パリ」では、レニエが編集長をよく知っていたこと、また、「ルヴェ・ブランシュ」ならば、エレディアが口を利いてくれるかもしれないということを、ヴァレリーは知っておりました。ヴァレリーは、自分のテキストを、レニエに託しますが、返事のかんばしくありませんでした。レニエは、ヴァレリーに、ヴァレリーの文章がやはり、これらの雑誌が発表を受け入れている内容とそぐわないことを知らせます。話は結局うまくいきませんでした。残る道は、もう一度、ジュリエット・アダン夫人のところを持っていくということしかありません。4月の半ば、レオン・ドーデは、話をまとめるために、アダン夫人に最後の訪問をすることができるということを、ヴァレリーに知らせます。

13) ヴァレリーは、果たして、アダン夫人が要請した通りに、テキストの冒頭を手直したのでしょうか？とりわけ、最初に冒頭句になるはずだった「私はひとり人間を想像

するつもりだ *Je me propose d'imaginer un homme...*」という部分を、(第二段落に) ずらし(て、新たな冒頭を作っ) たのでしょうか? そういう仮説が作られたこともあります、しかし、実際には、ありえなかつただろうと思われまゝです。というのも、仮に、冒頭を書き直したところで、結果は何も変わっていただろうからです。読者をよりよく「おびき寄せる」ために最初の三ページ分を「書き直して」ほしいと依頼したとき、ジュリエット・アダン夫人が望んでいたのは、ヴァレリーが、最初の三ページ分を単純でわかりやすいものにしてほしいということでした。ところで、仮に、そのように、単純化していたとしたら、私たちが現在親しんでいるこのレオナルド論が保っているテキストの調和を、破壊してしまっていたことでしょうか。したがって、結局は、友好的な圧力が働いて、アダン夫人は、ヴァレリーの論文の(提出されたままの) 当初の状態を受け入れたものと考えられることができます。それでは、ヴァレリーを後押ししてくれたのは、いったい誰だったのでしょうか。まず、レオン・ドーデの口ぞえがあったことはほぼ確実でしょうし、ジョルジュ・ユゴーの応援もあったかもしれません。この人は、詩人ヴィクトル・ユゴーの孫で、「ラ・ヌーヴェル・ルヴュ」誌でジュリエット・アダン夫人の下で働いていた人物です。ヴァレリーは直接、ジョルジュ・ユゴーを知ってはいなかったようですが、シュウオップが、この人物と友好関係にあり、ヴァレリーを助けてくれるよう依頼したのではないかと考えられます。いずれにせよ、一件落着まではかなり時間がかかりました。論文はなかなか雑誌に掲載されず、当然、ヴァレリーは心配します。夏の初め、マルセル・シュウオップは、ヴァレリーの論文がなかなか載らないことについて、ジョルジュ・ユゴーに相談します。ジョルジュ・ユゴーは、6月23日付けの手紙で、ヴァレリーに、論文は8月1日号の雑誌に「間違いなく」載る予定であること、そして、「深遠な作家にして独自の思想家」に対する尊敬の念を伝えます。そしてついに、『序説』が掲載されるわけですが、それは、8月1日号ではなく、8月15日号でした。

14) 少々波乱に満ちた運命をたどって世に出たこの論文は、ヴァレリーにとって、十全なかたちで、ひとつの作品(業績)となりました。そこで、彼は、あのダ・ヴィンチのフランス学士院版『手稿』を編集した優れた出版者であるカンタン書店に、自分の論文の抜き刷りを百部刷ってくれないかと依頼します。その後、ヴァレリーは、軍事教練を終えるためモンペリエに下り、そこで、抜き刷りを友人たちに献呈することになります。しかし、ヴァレリーは、かなりの部数を自分で保存し、数年後に、新しく友達になった人々に、自分の旧作である『序説』を好んで進呈することになります。が、とにかく、さしあたって、ヴァレリーは、シュウオップに対して、深い感謝の念を持ち続けていました。彼はこう書き送っています。「カンタン社に依頼して、冒頭に「M・シュウオップに *ter quaterque* (三倍四倍の感謝をこめて)」と記した抜き刷りが出来上がったら、モンペリエ(ヴィエイユ・アンタダンス通り9番地)から、あなたにお送りいたします」。ところが、ヴァレリーがカンタン社から抜き刷りを受け取ってみると、献辞が落ちていることに気付いて憤然とします。ヴァレリーが後に、1919年になって、『序説』を再版したとき、彼は、その献辞をし

っかりテキストに刻み込ませますが、この身振りは品を欠いた行為にはならないのです。というのも、シュウォップは、1905年に他界し、もはやその献辞を読むことはなかったのですから。

15) ヴァレリーはおそらく、彼の周辺の人々に、かなりの数の抜き刷りを配ったはずですが、彼がどのような返事を受け取ったのか、また、『序説』がどのような反応を引き起こしたのか、たいしたことはわかっておりません。明らかに、このテキストは、読者を困惑させるだけだったようです。「メルキュール」誌10月号の「新聞雑誌紹介欄」に載った、詩人エドモン・ピロン署名になる概要報告は、ほとんど、ただ、引用を組み合わせただけのもので、「ヴァレリー氏は、深い知性に裏打ちされた明晰さでもってダ・ヴィンチの方法について語っている」という、実におざなりな言葉があるだけでした。ラヴェッソン=モリアンにも抜き刷りを送ったようですが、そのお礼の返事を読んだヴァレリーは、おそらく、微笑を禁じえなかったでしょう。ラヴェッソン=モリアンは、紋切り型のお世辞を並べた後で、こう書いています。「私の編纂したダ・ヴィンチ手稿がどのようなものであるか、いくらか、語って、読者がそれを直接検討するように誘ってくださらなかったのが残念です」。ごく親しい友人たちの反応はどうだったかという、おおむね、短いコメントだけで、あまり詳しいコメントは示しておりません。シュウォップはもちろん、改めて、友の作品を称えます。ヴァレリーは、11月1日付けの手紙で、シュウォップへの恩義を再度言葉にして、こう書いています。「あなたのお気に召すものを書くことができたとすれば、それはまさしくあなたのおかげです。あなたは、私に対して、誠実かつ明晰に、勇気付けてくださった唯一の人物です」。結婚の準備に忙しかったジッドは、抜き刷りを受け取ったことだけをとりあえず伝え、感想についてはまた改めて語ろうと約束するにとどまりました。フォンテーナスは、論文が非常に気に入ったこと、「とても素晴らしいと思う」と親切な言葉を送っています。ピエール・ルイスは、「すごいぞ」と短く述べているだけです。ヴィエレ=グリファンは、ナゼルの城館から、ヴァレリー宛、こう書き送っています。「あなたのこの仕事にコメントをつけるなどという大それた勇気を私が持つことはないでしょう。あなたの論文を読んで、私は大いに学ばせてもらいました。あなたの将来がどれだけ素晴らしいものか、それを知りたいという私の称賛の念の告白以外には、コメントのしようもないのです」。ヴィエレ=グリファンのこの見解にはもっともなところがあります。というのも、伝統的な詩を書いていたそのデビューの頃の後で、ヴァレリーが経験しつつあったこの急転回（転機）は、彼の友人たちを不思議がらせたからです。そして、9月の初め、マラルメから一通の手紙がヴァレリーのところに届きます。マラルメはこう書いています。「つまり、論文は掲載されたわけだね。私は、君の論文を読んで、魅了された。びっくりしたのではない。繊細微妙な浮き彫りのすべてと共に、（その素晴らしさは）察せられたよ、何度も、君が高度に思考した対話の途中に（それは、示されたものだ）、親愛なるヴァレリーよ。それは私の心を打つ。どれだけ、君が、ほとんど目には見えない指使いで、君の新しい精神による極めて理解可能で、鋭い、現在のシンフォニーを、間隔を空けて、そして、グループへ

と、まとめあげていることか。まさしく、その指使いは見事で、脇に逸れることがないために、ダ・ヴィンチの形象（フィギュール）は、その報酬をしっかりと受託している」（1895年9月6日付けの手紙）。

16) それから数ヵ月後、テスト氏という偉大な形象が、今度は、レオナルドとはまったく違う形で造形されることになります。『序説』が感覚的な世界に開かれていたとすれば、『テスト氏との一夜』は抽象的な作品となります。これら二つの作品を結び付けているのは、ポルトレ（肖像・ポートレイト）という概念です。『序説』が発表されてから数ヵ月後の1896年初頭、あるポルトレを書いてみたいという欲望が、形をとることになります。そして、おそらく、この欲望は、モンペリエでの古い思い出と結びついているのではないかと思います。モンペリエのファーブル美術館で、ヴァレリーは、アルフレッド・ブリュイヤスが寄贈した一連の絵画を眺める機会があったかもしれません。このブリュイヤスという人物は、金持ちのプロテスタントで、彼自身、絵の勉強をした後、芸術庇護者（メセナ）、兼、大収集家となった人物です。ヴァレリーは、また、驚くべき、ポルトレの連作をも、嘆賞して眺めた可能性があります。というのも、ブリュイヤスは、立て続けに、自分の肖像画を、いろんな画家に描かせているからです。1845年にはマテ、翌年にはカバネル、1848年と1849年、二回にわたってグレーズ、そして、とりわけ、1853年にはドラクロワ、翌年にはクールベが、このブリュイヤスという人物のポルトレを描いています。このクールベの絵こそ、画家クールベが、召使と犬を連れた絵画愛好家と出会うところを描いている、あの有名な「こんにちはクールベさん」です。ひとりの同じ人物が、異なる視線のもとに、繰り返し現れてくる、ファーブル美術館のこのギャラリーは、ヴァレリーに深い印象を与えたはずで、ヴァレリーは、このブリュイヤスという人物について、1891年に初めてユイスマンスと面会した折にも、話題にしています。おそらく、かなり早い時期から、ヴァレリーは、こうした肖像の、一種の文学的な転置を考えていた可能性があります。1896年初頭、ヴァレリーは、ドガの（文学的）ポルトレを書いてみることを考えます。しかし、ヴァレリーは、カミーユ・モクレールという若い作家がドガのことを書こうとしたのを、ドガは、好意的な目で見えていないという話を知っていました。ヴァレリーはまた、偉大な数学者であるアンリ・ポワンカレの肖像についても考えていました。この数学者とは毎日、近所ですれ違っていて、ヴァレリーは尊敬していました。肖像を描くためには、その人物をよく知っているほうが望ましいことにはちがいないからです。しかし、一方で、たとえば、（ローマの皇帝）チベリウスのような人を考えます。そしてついに、セシル・ローズを肖像の対象として考えるに至ります。ヴァレリーはローズと直接面識はありませんでしたが、1896年の春に、ローズが経営するチャータード・カンパニーという会社の宣伝の仕事のために、いくつかの記事を訳しに、ロンドンに出かけて以来、彼は、ローズという人物を尊敬しておりました。ヴァレリーが、数ヶ月以前に、ドガやポワンカレについてやってみようと計画していたポルトレと似たような文学的肖像の計画を温めるのは、ちょうどそ

の頃だったかもしれません。次に示す断章が属していたのは、たぶん、そうしたテキストのひとつだったのではないのでしょうか。「そして、今や、その人物が、行動のために行動している様子、人が純粋科学に熱中するように純粋行為に熱中する姿が見える。その人物が、この熱情に心焦がしている様、この驚くべき放蕩に心焦がしている様うかがえる。広大な領土が彼の手の間で形を変え、人間たちが走り回り、戦い、ひとつの強力な思考がその人間たちに割り当てる円環の中で豊かになり、そして、人間たちの本能と本性の働きによって、天才的な遊戯者によって予見されたことがらを、それらの人間たちがやりとげるのを感知して初めて、その人物の熱情・放蕩は満足するのだ」。

17) ヴァレリーが『テスト氏との一夜』を書くのは、1896年8月、モンペリエにおいてです。このテキストには、二つのモデルがあります。私が今述べましたポルトレがひとつ、そして、もうひとつがデカルトです。『序説』を書く以前から既に、1894年の夏、ヴァレリーは、デカルトの『方法序説』を、新しい見方で読み直しています。その見方というのは、デカルトの『方法序説』に含まれる小説的な部分と自画像的な部分に注意を払ったものです。そのことは、レニエ宛の手紙（未刊行）で明らかにされています。そこで、ヴァレリーは、デカルトの書物の中に、「再度取り組まれることの可能な作品のひとつの形式を構成する諸要素」を見出しています。ヴァレリーは続けて言います。「というのも、そこに見出される自伝的な部分は、哲学的な輪郭を、奇妙なかたちで拡張しているからです。人は長い間、そのことを忘れていました。実際、そこには、「小説 roman」の萌芽があって、それは今でも、作るに値するものです。広大な精神の小説であり、そこには、知的な探究が経験する様々な姦通や室内装飾や決闘が含まれています」。しかし、それではどうやって、デカルト的な方法から、書き上げるべきヌーヴォー・ロマンへと、移行すればいいのでしょうか。計画は着手され、ゆっくりと進行していきます。1894年の11月頃、ヴァレリーが開始した最初のカイエ（オレンジ色の表紙を持ったカイエ）の中で、ヴァレリーは、「某氏の肖像 Portrait de Monsieur Un Tel」に関連したメモを書き付けています。そして、同じ頃の手帖には、具体的に、こう記しています。「騎士オーギュスト・デュパンの生涯と孤独な冒険。騎士デュパンの回想録。ロンドン、1853年。精神のカサノヴァ」。この考えは、まさに、ヴァレリーがそのレオナルド論に取り掛かっている時、ちょうど、1894年の年末あるいは翌年1895年の初頭に、形をとることになります。ヴァレリーは、これらの「回想録」の最初の数行を書き記しますが、それは、デカルト的な自伝的次元と一致します。すなわち、再び着手されるやいなや、これらのメモは、テキスト決定稿のプロローグを構成することになるのです。しかし、これらの「回想録」の場では、デュパンが、自伝的な様態で、あるいは、自画像という様態で、喚起されていたのに対して、新たに着手されたテキストでは、テスト氏を紹介するというモードではなく、主人公と過ごした一夜を語る前に、語り手が、一人称で自分自身を語るという様態（モード）が採用されることになります。

18) ヴァレリーが「デュパンの回想録」という計画を放棄するのは、彼が当時、他の計画を必要としていたからですが、とりわけ、その素描が、あまりにも明らかに、エドガー・

ポーの敷いた道に取り込まれたものだったという事情がありました。また、それは、将来的に『テスト氏との一夜』となっていくアイデアの初期のものが、『序説』のアイデアになるものと、言わば、パラレルな関係にあったこと、ほぼ同時代のアイデアであったということと無関係ではなかったでしょう。しかし、二つの作品を隔てる一年半の間に、ヴァレリーは、二つの深刻な危機を経験しました。すなわち、1895年末の深刻な感情的危機と、もうひとつは、先にも触れましたロンドン旅行の際に経験した危機です。ヴァレリーは、一時は、自殺することを考え、実に深刻な鬱状態を経験しました。彼は、また、そうした危機を通して、人間的にも成熟しました。『テスト氏との一夜』というテキストは、もはや、いわゆる若書きのテキストでは、まったくありません。人間的な強化・深まりということが達成され、とりわけ、創造（クリエイション）が達成される精神を描いた『レオナルド・ダ・ヴィンチ方法序説』の後で、今度は、その広大な知的資源が、レオナルドとはまったく逆に、潜在状態のままにとどまるような、そんな精神のポルトレを描き出すことが問題となっているのです。文学は、おそらく、ここでは、まだ、追い払われております。すなわち、テスト氏は、ものを書くということがありませんし、二十年来というもの、テスト氏は、書物を所有するということがありません。しかし、レオナルド論において完全に官能的で具体的な十全さを構成していたものが、ここでは、純化されることとなります。『テスト氏との一夜』という散文は、抽象的な散文ですが、それは、今や、その力が確かに行使されうるのだけれども、しかし、実際に行使されることはないような或る人間のポルトレ（肖像・ポートレイト）を描き出す、そんな抽象的な散文なのです。レオナルドがその持っている様々な手段をあまねく普遍的に展開する人間だったとすれば、ムッシュウ・テストは、それとはまったく逆に、そうした手段のすべてを保持したままにしておくような、そんな人物なのです。テスト氏が保持している手段は、おそらく、見事な手段です。というのも、「もしテスト氏が、その精神の規則的な力を世界に対して振り向けていたとすれば、彼に抵抗しうるものは何もなかったであろう」というようなそんな人物なのです。しかし、その手段はテスト氏自身に向けられ、その結果、その力は誰にも知られることのないままにとどまります。したがって、テスト氏が、私たちに対して、ごくありふれた凡庸な人物の見かけのもとに与えられたとしても、驚くにはあたりません。テスト氏の天才は、テスト氏自身にとって、容易なものであって、その天才が人々の目にさらされることはないのです。ダ・ヴィンチがすべての人に知られた人物だったとすれば、テスト氏は、それとは逆に、誰にも知られることのない人間、誰も気付かない人間なのです。テスト氏は、影の人であり、その友である語り手がテスト氏に会うのも、時間帯として、常に夜です。まず、語り手は劇場でテスト氏に会いますし、そして、その後、テスト氏の陰気な部屋で対話をします。主人公の名前そのものについて言えば、この奇妙な「テスト」という名前の意味をめぐって、実に様々な解釈がこれまでになされておりますが、ごく単純に言えば、これは、マラルメが知っていたというヴァルヴァンの住人の名前だそうですし、また、このテストという名前は、レオン・ポール＝ファルグが後に、『ヴィルジュスト街』と

いう題名の、小さな回想記の中で、冗談めかして書いているのですが、1894年に「ル・マタン」紙が主催した自転車のフランス一周レースの優勝者の名前だということです。

19) 主人公を要約するような問、すなわち、「ひとりの人間に何ができるか？」という問は、まさに、若いヴァレリーの問そのものでした。およそ、30年後、ヴァレリーは、ジャン・プレヴォー宛に、こう打ち明けています。「テストについては、真実は単純です。つまり、私は、長い間、認識というものについて、というか、むしろ、ある種の操作について、探究を重ねてきました。私は、テスト氏に、そうした認識や操作を発見した人物の状態を仮託したのです。ああ、と嘆くべきか、それとも、幸運なことと言うべきか、私はただの対話者に過ぎず、今も、そうに過ぎません」。テスト氏とその語り手の出会いにおいて、書き手がテスト氏と語り手の両方に同時に存在しているかのように、一種の分身化が起きているということが納得されます。ヴァレリーは、『序説』において、既に、レオナルドに自己を投影しておりましたが、『テスト氏との一夜』においてもまた、一種の鏡の構造が、テスト氏とそれを称える語り手の間に成立しております。たとえば、「私は、彼が見られていると感じているかどうか自問した。私は視線を彼の視線から乱暴にそらして、彼の視線が私を追いかけるところをつかんでやろうとした」。『テスト氏との一夜』のはじまりの部分で初めて読んだ読者は、テスト氏が自分自身のことを語っているのではないかと思うでしょう。しかし、その部分で実際のところ、短い自画像を描き出しているのは語り手のほうなのです。「私は自分を憎み、自分を称えた。そして、われわれは共に年老いたのだ」というところや、また、「愚かごとは私の得意ではない」というところなどがそうです。テスト氏ではなく、語り手を紹介しているこの興味深い冒頭句は、もちろん、ヴァレリーが、「デュパン回想録」の冒頭から取ったものに起因しています。そこでのデュパンは、思考し、そして、自らに語りかける人として構想されていきました。しかし、ここに、いくらか、エドガー・ポーの思い出が残っているとすれば、それは、眩暈のような明晰さが描かれている点でしょう。ナルシスの記憶の中で倍化される明晰さは、テキスト結末部の、主人公のこんなセリフにうかがえます。「私は存在している、私を見ながら。私を見る私を見ながら。以下同様」。この意識の主人公は、思考を、自分の存在の全体とし、そこに、自分の身体そのものも従わせようとします。ちょうど、「ジェノヴァの危機」の後で、ヴァレリーが、そうしようとしたのと同様です。しかし、完全には、その目論見はかないません。『テスト氏との一夜』の最後のところで、テスト氏を打ちのめす苦痛が、この望まれた支配統御を無効化するのです。それは、多くの点で、レオナルドに引き続いて、再び、ヴァレリーが構築しようとした、彼の理想の「自我」のひとつのフィギュールだったと言えます。

20) モンペリエでは、最初の熱狂が落ち着くと、ヴァレリーはまた仕上げにぐずぐずすることになります。8月の終わり、アンリ・アルベール（ニーチェの翻訳をする人です）に、原稿の送付を予告します。原稿は、「サントール」誌に掲載されることになっていました。しかし、送ると言っておきながら、『テスト氏との一夜』はまだ完成していませんでした。ヴァレリーはジッドにこう書いています。「この男（テスト氏のこと）は僕を悩ませる。ど



うやって片付けたらいいのかわからない。神経痛がひどくて、ただひたすら呆然とすることができないような時は、特にそうだ。しかし、文体を除けば、全体の構成と組み方が失敗している。二つか三つ、面白いことを書き込んでいると思うのだが、よくよく近づいて見ると、全然、**文学的ではない**」。実際、ヴァレリーは、ハイブリッドなテキスト、構築の困難なテキストを書くことに乗り出しておりました。というのも、『テスト氏の一夜』というテキストは、執筆当初は、もっと連続的に構成された語りを考えていたようですが、次第に変化して、まったくのポルトレ（肖像）というわけでもなく、また、完全なレシ（物語）というわけでもないテキストへと変わっていったからです。ヴァレリーはレニエ宛にこう書いています。「不幸にも、私は泥沼にはまっています。ある物語を語りたいのですが、最初の言葉が見つからないのです」。ヴァレリーは、結局、主人公の全体的な物語というよりは、むしろ、主人公のいくつかの時を描くことにテキストの焦点を絞ることに決めます。早く書いてしまわなければなりません。というのも、9月8日になってアンリ・アルベールは、じりじりして、早くテキストを渡してほしいと宣告するからです。アルベールがヴァレリーから原稿を受け取ったのはそれから数日後でした。そして、18日に、「サントール」誌の編集委員全員の熱狂をヴァレリーに伝えることとなります。「あなたの『テスト氏との一夜』は素晴らしい出来であると判断します」。

21) しかし、ひとつの疑問が宙吊りのまま残っています。献辞の問題です。モンペリエで授業を行っていた人種理論家のヴァシェ・ド・ラプージュから、マルセル・シュウォツブまで、さらには、ヴァレリーの友達でロシア人の若い哲学者ユージェーヌ・コルバッシューヌから、マラルメまで、エドモン・テストのモデルを捜し当てようとしばしばいろいろと努力がなされましたが、そうした議論は無駄でしょう。というのも、たしかに、この想像上の人物には、現実的な特徴が様々あることは事実だとしても、そうした具体的な特徴は実に様々な人物から由来しているので、これは誰といったふうには特定することができないからです。逆に、ヴァレリーは、こう言います。「私が考えていたドガは、自己を要約して一枚の克明なデッサンの厳密さと化した人物であり、彼はまたスパルタ的な禁欲主義者であり、言わば、一種の芸術上のジャンсениストであって、或る知的な残酷さがその本質的な性格となっていた。私は彼と会うのよりも少し前に『テスト氏との一夜』を書いたのだが、それがことごとく実証しうる、出来るだけ明確な観察や叙述から成るものであったのにもかかわらず、この架空の人物を描いた小品はやはり或る程度まで**私が考えていた一種のドガによって、よく使われる言葉で言えば影響されずにはいなかった**のである」。ヴァレリーは、この年1896年の初頭からドガを知っていたのですから、ここで、ヴァレリーが記憶違いをしているということはさほど重要なことではありません。ともかく、これらの言葉は、ヴァレリーが『テスト氏との一夜』をドガに捧げたいと思っていたことを説明するでしょう。しかし、まだ、ドガとそれほど親しい間柄ではなかったということもありましたし、ヴァレリーは、時に乱暴なまでに激しいドガの反応を警戒していたので、自分の気持ちを伝えることができなかったということがありました。そこで、ヴァレリーは、

ユージェーヌ・ルアールに間に入れてもらって、画家に、自分の献辞（それはうやうやしく氏名のすべてを入れた「エドガー・ドガ氏に」という丁寧なものでした）を受け入れてくれるかどうか、聞いてもらったのです。もし、『テスト氏との一夜』がもっと後になって出版されるのであったならば、ドガはその後、実際、ずいぶんヴァレリーのことが気に入って、言わば小言は多いけれども愛情深い態度を示すことになるので、ドガもおそらくは受け入れたかもしれません。しかし、二人の関係はまだそこまで進んでいなかったのも、ユージェーヌ・ルアールも、確信は持てないまま取り次ぎました。ラ・キュー・アン・ブリの家から、ルアールは、兄のルイ宛に手紙を書いて、画家を訪ねて欲しいと依頼します。返事はきっぱりとしたものでした。「私に理解できない代物を捧げられるのはごめんだ。詩人はもうたくさんだよ」。たぶんヴァレリーはがっかりしたでしょう。結局、彼は、このテキストを、ユージェーヌ・コルバシーヌに捧げることにしました。

22) 友人たちの評価が『序説』の場合ほど控えめでなかったのは、『テスト氏との一夜』がさほど困惑させる作品ではなかったからです。小説家のジャン・ド・ティナンは、アンリ・アルベールからすぐに原稿を見せてもらい、彼もまた「素晴らしい」という判断でした。ジッドは、ヴァレリーがモンペリエにいたので、テキストの校正を担当したのですが、はっきりと「並ぶものがない出来だ」と称賛しています。ピエール・ルイスは、「びっくり仰天した」と言います。「君にそれほど期待していなかったというのではない。断じてそうではない。しかし、こんな（すごい）ものとは思わなかった。これは、まさしく、確信してもらってよいが、「作るべきもの」ものだ。そして、それは書かれた！……完璧だ！」ルイスはさらに実に慧眼にも次のように付け加えます。「不幸なのは、僕が君を知っている限りにおいてだが、君がこの十ページを書いたことで、少しばかり自分の価値が上がったなどとは考えないにちがいないということだ（→君はもっと自分の才能を評価していいのに）」。実際、ヴァレリーは、すぐにルイスにこう返事を送っています。「『テスト氏』の「エキリチュール」についての話は勘弁してくれたまえ。一週間で手当たり次第に（運任せで）材料をつなぎ合わせて作った代物なのだから」。この言葉は嘘ではありません。というのも、実際、ヴァレリーは、常に、断章をつなぎ合わせて、テキストを書いていったわけですから。この謙遜は見せ掛けでなく、本当にそうなのです。こうした謙遜は、ヴァレリーが自分自身の仕事についてしばしば持っている疑念に大きく起因しております。より深いレベルで言えば、この謙遜は、ヴァレリーだけが測ることのできる差異、すなわち、自分が作りたいと思ったものと、実際に自分が作ったものとの間の差異に起因しているのです。ヴァレリーにおける書くことの困難は、しばしば、彼自身が最初に設定する極めて高いレベル、そのレベルの高さに起因します。結果として、彼は、実に多くのテキストを未完成のまま残すこととなります。それらの未完のテキストは、ヴァレリーがそれらに与えたいと望んだ完璧性のレベルまで到達することがなかったからです。こうした謙遜は、ヴァレリーという作家の矜持の別の一面と言ってよいでしょう。

23) 以上、『レオナルド・ダ・ヴィンチ方法序説』と『テスト氏との一夜』という二つの作品についてお話をしてまいりましたが、これは結論を促す種類の話ではありません。しかし、この二作品は、いわゆる「ジェノヴァの夜」以後の沈黙という伝説に疑問符を投げつけるものです。ヴァレリーは、(あらゆる文学を放棄する決心をしたとされる) 1892年秋のこの伝説的な一夜のあとも、こうしてテキストを書き続けておりますし、韻文ですら、書いております。「サントール」誌の創刊号にはヴァレリーの韻文詩が掲載されました。それから、ヴァレリーは、(感情的なものを抑えこんで知性の統制下に置くという、いわゆる「ジェノヴァの夜」の「回心」のあとも、) 自分の感情生活を完全に統御することはもはやできませんでした。先にも述べましたように、ヴァレリーは、1895年の12月に深刻な感情的危機を経験しました。ヴァレリーの初期の時代が本当に終わりを告げるのは、むしろ、1897年でありましょう。その年、ヴァレリーは、1895年春に『序説』を書き上げた直後に受験した陸軍省書記官の採用試験に合格し、少し遅れて1897年から勤務開始となります。1897年、いかなる個人的な決心も書くことを妨げることはありません。しかし、仕事の忙しさのために、もはや、十分な時間を持つことができなくなります。知られている通り、ヴァレリーが本格的な執筆活動に回帰するのは、1917年、『若きパルク』の出版の時となります。